

第一〇句集

『風霜記』



水蜜桃の紅透く籠目の切子鉢

(昭和五六年)

美意識の透った細身の句。水蜜桃のほんのりとした紅の色が、籠目の切子鉢に透けて見える。籠目というのは籠の目のような文様をいう。おそらくは江戸切子であろうが、どこかきりりとした上品な風情がある。三つのk音の頭韻も雰囲気を引きしめている。八束にしては珍しい雰囲気の句だと思う。この句では、「紅」を「こう」と読ませている。「すいみつ」と涼やかな音韻に対しては、やはり「こう」の方が格段にひびきが美しい。中七が字余りになっっているため、「べにすくかごめの」と濁音が重なって重い印象を避けたかったのだろう。

蝶がゐて草の泉を傷つける

(昭和五六年)

これまた繊細な心理の句。夏草の取り巻くしずかな泉。そこに蝶が来ては、水面を揺らしてゆく。そのさまが泉を傷つけているように思われるというのだ。なにやら寓意性を感じるが、その意味を私生活に訪ねる趣味は私にはない。それよりも、普通の尺度で言えば可憐な「蝶」といえども、しずかさを佳しとする「草の泉」の側からすればとんでもない無法者という見方の反転が面白い。草の泉というのもつましい束の間の平安。そんな時間を揺さぶられたくない気持ちは誰もが有するのではないか。自分が繊細であるがゆえに突然の闖入者を荒々しく感じたのか。その「蝶」は「ゐて」、「泉」を傷つけていることに気付いてはいないだろう。すぐには飛び去らないのだ。

無垢の星背負ひし妻の墓洗ふ

(昭和五六年)

先に亡くした妻の墓参りをしたときの作。「妻あるも地獄」と詠んだその妻も、「無垢」な部分のみ思い出される。「無垢の星」を背負って生きてきた妻であったのにちがいない、と非情の運命を振り返り自分の非を懺悔してやまない八束の悔恨がいたく感じられる。この句では、「無垢の「星」という夜空に通じるイメージと、「墓洗ふ」という灼きつけるような夏の真昼のイメージが同居する。八束の脳裏の風景(＝過去)と眼前の現実風景(＝現在)とが表裏一体となって、この句の立体感を生み出しているところに注目したい。

秀ほつ鷹たかはいつも喬木たかぎに雪の与謝

(昭和五六年)

この句の「秀つ鷹」は、万葉集の伴家持の長歌に由来する。「思放逸鷹、夢見感悦作歌」(万葉集一七・四〇一一)と題するたいへん長い歌なので全体は各自調べていただくことにして、要点をかいつまんで言うと、越中の国司時代、秋になると官人たちと鷹刈りをして無聊を慰めていた家持だったが、その自慢は「大黒」という名の「矢形尾の蒼鷹」だった。ところがある日、「ばかな爺さん」がこの鷹をあやまって逃がしてしまう。家持はその鷹が逃げたことが残念でならない。とうとう神頼みをしてみると、その夜の夢に巫女が現れて、「その秀つ鷹は」松田江の浜から氷見の江を過ぎ、多古の島を飛びまわり旧江に一昨日も昨日もいました。早ければ二日ほど、遅くとも七日以内には戻ってくるでしょうから、そんなに恋しく思いませんかと告げてくれた。と、ここで長歌は終わる。文字通り夢のような劇的なハッピーエンドだが、鷹に会える可能性を示唆しての未完の綴じ方などは現代的でもある。

丹後地方の与謝を旅した折、雪の喬木のでっぺんにいる鷹を見つけて、八束はその「秀つ鷹」の歌を思い出したのであろう。「鷹」をキーワードにして、八束の世界は現在から遙かな万葉の世へと一気に溯る。越中と与謝では少し地理的には離れているが、日本海側の陰鬱な冬の気象を思えば、心理的にさほど違いはなからう。ほんとうは、家持へ辿る途中に「与謝」に足がかりのあった蕪村を意識していたのかもしれないが、東京から遠く離れた与謝を訪ねての孤愁に、八束の時間はほとんど古代へと帰ってゆく。同時に、雪の高木のでっぺんに止まっている鷹こそ、現代俳句追求のあまり私生活を破綻させてしまった八束の孤心かつ孤高の象徴でもあった。

さて、秀つ鷹は家持のもとへ帰っていきそうな気配だが、八束の孤心はどこへ帰っていかうというのだろうか。

雪の丹後感じて婦つまとすものあらむ

(昭和五六年)

先の作品四の次に置かれている句。八束の孤独感が慰められるものは、こんな雪の丹後にあるのか否か。この句を文字通り「婦とすもの」を切実に探している、と受け取ったのでは作者の心理には沿うまい。この「あらむ」は反語的なニュアンスを多分に含んでいる。「あるだろうか、否、なかなかないだろう」くらいに受け取りたい。実際のパートナーとしての「女」自体を求めているのではなく、八束の場合、(雪の丹後に長い冬を耐えて生活している

女性のように）八束の孤心と共に耐えて、そのころをしずかにしつとりと包んでくれるような「婦（おんな）」的な心なさを求めていたのではないだろうか。無論、そんな都合のいい話は女性の方からも御免であろうし、八束もそれくらいのことには自覚しているからこそ、「婦とすものあらむ」と反語にして、しんしんと身心にしみこむ「雪の丹後」の情感に浸りながら、翳りある自分の歳月を振り返っているのだろう。

戦時中、三好達治が越前の三国に疎開していた折、萩原アイとの恋愛が破綻して、「たかだや」の女将に心の救いを求めていく情景とどこか重なり合ってくるものを、この句から感じることがある。句自身は、「雪の丹後」と大胆な広やかな上五を冠して、中七以下が「感じて婦（つま）とものあらむ」と含羞めいたやわらかい調べで、雪の翳りをしずかに心の中へ引き込んでいく。景に向き合って主情の滲み出た、叙情性の濃い作となっている。

谷川の音天にある桜かな

（昭和五六年）

谷川の音が天に吊られていて、その下に桜が咲き満ちている。もちろん実際に、谷川の音は足もとにあるのだが、瑞々しい桜を見上げているうちに、桜がせせらぎを天から浴びているように感じられたのか。ともあれ、虚構に遊んでの立体的な句になっている。この句では、谷川の音が天に吊られて光と交響し、ひいては桜の色と響き合っている。音と色が光に包まれていると言ってもよい。万物照応（コレスポンド）を得ている宇宙感に満ちた作で、二物衝撃の句としても堂々としている。

窯町の野辺送り^{かままち} 旃山^{はた}笑ふ

（昭和五六年）

この句に初めて接したのは句会の時だったが、非常に懐の深い感じを受けた。窯業に長く携わっていた職人が亡くなって、旃を立てての野辺送りの行く先は、いつも見慣れていたうぶすなの山のふところ。しかも春のやわらいだ山だというのだ。死後も山があなたかく迎えて包んでくれる。なんとなく幸福感に満ちた葬送ではないか。ここには生活（生）と死があなたたかい山（自然）に包まれて同居していると言ってもよいだろう。死をテーマにしながらも、おおらかな世界がここにはある。

白根葵しらねあひ咲く雪溪ゆきせきのうるむほど

(昭和五六年)

白根葵は金鳳花科の高山植物で、うす紫色の美しい花。日光の白根山に多く見られ、また立葵の花に似ているところからこの名があるらしい。この句は薄紫の花が白い名残り雪に「うるむほど」ひろがって咲いているところが美しい。ちようどへかたまつて薄きひかりの董かな 渡辺水巴を雪溪に敷いたような、彼の世へと通うような澄んだ美意識の作だ。こういう「うるむ」は先に言ってしまった方が勝ち。後からは二度と使えない。句の姿の方は、七・五・五の形で、「白根葵咲く」とゆつくりと間合いを取った後で、「雪溪のうるむほど」と発想を転換し、コンパクトな言い方で余情を残す。下五の「うるむ」という語は「ウ」音が三つ続いて、いかにもうるんだ感じを与える。

海霧じりくれば海霧を払ひて踊りけり

(昭和五七年)

礼文・利尻に取材した一連の作の一つ。海霧(じり)というのは、主に北の地方で夏に発生する深い海の霧をいう。この句は、鄙びた村の夏祭であろうが、海霧が押し寄せてくると手踊りの手で海霧を払うようにしながら、いつまでも踊り続けているというのだろう。この句を読むと、はじめは島の人々が輪をなしながら踊る姿を思い浮かべるが、句を読み終わる頃には、いつの間にか一人の踊り手のみ浮かび上がってくる。一人孤独に手で海霧を払いつづけているさまが、降りかかる運命をけんめいに払いのけているように感じられるのだ。眼前の情景を描きながら、八束の表現する俳句の世界は現実描写にとどまらない。八束自身の孤独な生き方あるいはその内面の世界まで、「じりっじりっ」と浮かび上がるように描いているのだ。こういう句は、対象にじっくり向き合いながら、自分の心にしずかに問う時間がたっぷりなければ完成しない。八束もこの句を作るために、番小屋に数時間こもったという。俳句には、即興性や「スポーツ俳句」的な瞬発力も必要かもしれないが、それだけでは内面風景の俳句は到底描けないだろう。不器用でもよいから、対象に真向き、同時にじっくりと自分を見つめる時間をもちたい。

梅を干す廃仏毀釈の坊の庭

(昭和五七年)

こういう句を見ると、なぜ「梅を干す」でなければならないのか、疑問に

思う向きも多いことだろう。「廃仏毀釈」というのは、ここでは明治の新政府が神道国教・祭政一致の政策が結果的に引き起こしてしまった廃仏運動を指している。私も地方で無残に仏像が破壊されて雨ざらしになっているのを見たことが何度かある。この句の寺院も例外ではなく、「坊の庭」の片隅に首が取れたり腕が挽げたりした仏像の残骸がまとめられているのだろう。そして、そこには梅干の梅も干されている。「梅を干す」という素朴な生活態度と、政策の先を読むように受け入れた仏像破壊という信じられない愚行。この相反する二つの態度がけなげな民衆行動の中に共存しているという不可避的な悲劇。八束は、その教訓と警告を含めて、この「梅を干す」を上五に冠したのではないか。やがて赤く色づく干梅は、人間の知恵の愚かな側面を筵いっばい目いっばいに読者に訴えてやまないのだ。

摺り足のきこえてきたり土瓶蒸し

(昭和五七年)

実際には、老舗の料亭で注文した松茸の土瓶蒸しを、仲居さんがしずしずと運んで来たさまを言いとめたものか。しかしながら、この句、最初に読んだときから、どことなく異界と接しているような雰囲気を覚えた。土瓶を運んでくる「摺り足」の音などふつうは聞きとめないだろう。ましてや、何人かで談笑しながら土瓶蒸しという贅沢な季節の物を待っているときには、もっと浮き浮きしているものだ。

この句は、一般的な状況とは異なり、一人ぼつねんと個室の片隅で座って「摺り足」が聞こえてくるのに耳を澄ませている。そんなちよつと異様な状況を思い浮かべてしまう。この句のすぐ後ろには「深酔ひの三好達治や土瓶蒸し」という句が続く。懐かしく昔を偲んでいる気分の中に、この「摺り足」も聞こえてきたのかもしれない。

蔓もどきまぜて餌をおく小鳥罨

(昭和五八年)

「蔓もどき」というのは「蔓梅擬(つるうめもどき)」の別称。秋にできるオレンジ色の実が美しい。おそらく、この実をまぜて置くのは、鮮やかなオレンジ色の実が小鳥の目に止まりやすいからなのだろう。そして、秋に渡ってくる小鳥が小鳥罨にかかりやすいように。「まぜて」の一語が巧みだと思う。なんだか恐ろしくて、できるならば覚えたくない句でもあるが、不思議なことにこのような句ほど印象に残って忘れがたい。人間界にとっての「罨」にもこのような鮮烈な目晦ましが混ざっているものだ。

風鳴つて霧氷の空の動きをり

(昭和五八年)

直前に〈最上川霧氷をつらね流れけり〉があるので、この句も同じ場所で詠んだものである。風の「音」が鳴りながら、「霧氷の空」が動いているようだというところに、この句の味わいの深さがある。霧氷の梢の動きに伴って空の揺れ動くさまに、聴覚と視覚が働いているのだ。風は強いが空は青空ではなからうか。

この明るく冷たい空気には、「実生活の上でも思わぬ蹉跌が起きて、無能な私の暮しにまたひとつ風霜のきびしさを重ねた」という身辺の厳しさと同時に、「拙稿「飯田蛇笏」の連載が続いて年余、私にはこの息抜きの旅中だけが、句を作る場所と時間であったのかも知れない」(共に句集あとがき)と自ら言うといったときのくつろぎが同居していよう。

この句をもって第十句集は巻を閉じる。第一句集『秋風琴』の〈流人墓地 寒潮の日のたかかりき〉から、ここまで四十六年が過ぎている。きびしい半生の果ての、八束の内面風景がそのまま外に現れたような句だと思う。